

佐渡相川の鉾山都市景観全覧図

(奈良文化財研究所景観研究室監修／北野陽子作画)

佐渡相川を俯瞰すると、海と山のあいだの狭隘な空間を巧みに利用して、町が造成されたことに気づく。台地上の斜面地を造成して築かれた上町、臨海部に造られた下町、そして山麓に形成された寺町。そして、下町のなかでも、河川にそって縦方向に斜面を造成して築かれた地域と海岸部に近世の埋立によって形成された地域が存在する。まさに相川の生活に限られた土地の空間利用とともに成り立っていたことに気付かされる。こうした土地造成でも、鉾山とも関わる石工技術が活躍した。また、飾り立てることなく、控えめで簡素な外観が維持されている町並みには灰色のセメント瓦と黒色等の焼瓦が混在し、時代の積み重なりを感じさせる。台地の縁辺部には特徴的な木々がみられる。タブノキとクロマツである。タブノキは相川の本原生でもあり、寺院周辺で現在まで継承されている。他方、クロマツは防風のため奉行所周辺に植えられ、現在まで継承されている。

一方、農地に眼を転じてみよう。多くのため池がみられる。ため池と縦横に張り巡らされた水路によって多くの農作物が収穫され、鉾山都市相川の生活を支えていた。

このように、限られた土地の巧みな利用と空間の関係性、そしてその背景に存在する鉾山都市由来という社会的特性が、現在の佐渡相川の景観を生み出している。